

日本語母語話者の英語使用場面におけるあいづち的表現 会話管理ストラテジーの観点から

大 塚 容 子

Back-channeling Expressions used by Native Speakers of Japanese in English Conversations

Conversation Management Strategy Perspectives

Yoko Otsuka

Abstract

The purpose of the study is to examine how differently English and Japanese speakers use the back-channeling signals when they communicate in English. It is said that the Japanese speakers use the back-channels more frequently than the English speakers. The phenomena may be one of the manifestations of the difference in conversation management strategy between English and Japanese: the listener's response plays a more important role in the Japanese conversations than in the English ones.

The back-channels are utterances which the listener produces while a conversation is carrying on. The listener informs the speaker that he or she is listening, and has understood what the speaker said. Using the back-channels can be said a behavior to make the conversation flow smoothly.

The data used for this study consist of two audio-taped and video-taped English conversations, in which the participants are two Japanese and two Americans. In this paper, we examine the following: 1) the frequency of the back-channels used by each participant, 2) a variety of back-channels produced in the conversations and 3) the difference in the function of the back-channels between Japanese and English. The results of our quantitative and qualitative analysis of the above research questions suggest that the back-channels should function as a conversation management strategy in Japanese listener's verbal behavior.

Key words

Back-channel, conversation management strategy, politeness strategy, common ground

はじめに

言語によって語彙や統語論的規則が異なるのと同様に、会話の管理のし方にも違いがある。どのように会話に参加し展開していくか、それをどのような方法で行っているかは、語彙や統語論的規則とは異なり明示化されにくいいため、母語話者にはほとんど意識されることがない。外国語教育ではコミュニケーション・ストラテジーとして提示されることが多く、日本語と英語の対照研究を行っている Maynard (1997) は、英語とは異なる日本語の6種類のコミュニケーション・ス

トラテジーを紹介している。その内容は、交渉のし方、聞き手の反応、沈黙の意味、協調と協力の重要性、会話の論理構造についてである。これらのストラテジーが示唆する日本語会話のあり方は、協調と協力を基盤にし、できるだけ会話参加者間での衝突を避け、調和を求めようとする姿である。このようなコミュニケーション・ストラテジーをもつ日本語の会話展開のなかで重要な役割を担うのが聞き手の反応で、相手からの質問に対して直接的に応答すると人間関係に問題が生じると考えられるようなとき、聞き手は沈黙という方法で対立を回避することもできる。

しかし、通常、聞き手はいわゆる「あいづちを打つ」という方法を用いて、話し手の発話に回答する。水谷(1983)はこの、日本語の聞き手によるあいづちの機能に着目して、日本語の会話展開を「共話」と呼び、欧米の「対話」型の会話展開と区別した。共話では、話し手と聞き手が協力し合って会話を展開させていくため、話し手による発話だけではなく、聞き手によるあいづちも会話の展開に貢献する。日本語会話では、英語会話の約2倍のあいづちが使用されるという報告(メイナード(1993:157))があるが、これは日本語の会話展開と密接な関係があると言える。

共話型の会話展開をもつ日本語母語話者が、対話型会話展開の英語を用いてコミュニケーションを行った場合、聞き手としてどのような言語行動をとるのであろうか。本稿では、いずれも異文化との接触のあまりない、日本語母語話者と英語母語話者⁽¹⁾とによる英語会話において、日本語母語話者がどのようなあいづち行動を行うのか、そのあいづち行動が英語話者にどのように解釈されるのかを調査する。

まず、日本語と英語におけるあいづちについて概観し、調査方法について説明する。次に、あいづちの使用頻度・種類について調査・分析し、それが会話管理ストラテジーとしてどのように機能しているかを検討する。

1. 日本語と英語におけるあいづち

日本語、英語におけるあいづちについて概観しておく。いずれの言語においても、言語表現に焦点をあてた研究と、うなずき・視線等の非言語行動を含めた研究(メイナード(1993)久保田(2001)等)とがあるが、本稿では非言語行動は扱わない。

1.1. 日本語におけるあいづち

日本語のあいづちに関する研究のなかで言語表現に焦点をあてたものには、水谷(1988)堀口(1988,1997)村田(2000)等がある。本稿では、聞き手の役割という観点からあいづちを捉えている堀口(1997)を紹介する。

堀口(1997:42)は、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義し、その代表的な例としてあいづち詞(堀口(1988))を挙げている。あいづち詞とは一般に聞き手があいづちとして発する「うん」「はい」「ええ」「そうですか」などの定型表現のことである。さらに、あいづちが発話権の取得に関与せず、情報の共有の確認という機能をもつことを踏まえて、相手の発話をそのまま繰り返したり、発話内容を言い換えたりして聞き手が応答すること、聞き手が話し手の発話を予測して応答する先取りあいづちや先取り発話も、会話の展開においてあいづちと同じような働きをするとみなしている(以下、このような発話をあいづち的表現と呼ぶ)。

1.2. 英語におけるあいづち

日本語のあいづちに相当する聞き手の反応は、英語では“back channel”などと呼ばれている（以下、特に区別する必要がない場合には、日本語の「あいづち」を用いる）。この用語を最初に用いた Yngve (1970 : 568) は、“back channel”について“the person who has the turn receives short messages such as “yes” and “uh-huh” without relinquishing the turn”と述べている。これは発話権をもつ話し手側からの定義であり、“yes”、“uh-huh”という応答があったとしても、発話権が譲渡されることはない。

Duncan (1974 : 166) はあいづちの概念を広く捉え、“back channel”に sentence completions、request for clarification、brief restatements 等も含めている。堀口のいう、言い換え、先取り発話と共通するものがある。

1. 3. あいづちの機能

Maynard (1997) が日本語のコミュニケーション・ストラテジーとして聞き手の反応を挙げていることから明らかなように、日本語と英語における聞き手の役割は異なり、そのためあいづちの機能も異なると考えられる。また、研究者によって機能分類は異なる。

日本語のあいづちの機能として、堀口 (1997) は 聞いているという信号、理解しているという信号、同意の信号、否定の信号、感情の表出の五つを挙げている。一方、久保田 (2001 : 138) は、英語のあいづちは聞き手が話し手の話を聞いているという信号のほかに、発話権がほしいという信号としても用いられると述べている。また、日本語と英語におけるあいづちの機能を調査したメイナード (1993 : 160) は、「続けてというシグナル」(continuer⁽²⁾)、内容理解を示す表現、話し手の判断を支持する表現、相手の意見、考え方に賛成の意志表示をする表現、感情を強く出す表現、情報の追加、訂正、要求などをする表現、が含まれるとしている。

これらの研究から、聞いている、理解している、同意する、感情を表現する、の4点は日本語と英語に共通する機能と考えてもよいだろう。もっとも、聞いていなければ、理解することも同意することも感情を表現することもできないのであるから、あいづちの基本的機能は聞いているという信号であり、聞き手が話し手の発話内容に対する関与の積極性の程度によって、機能に違いが生まれるのであろう。

1. 4. 調査対象とするあいづちの定義と分類

堀口 (1997) が指摘しているように、あいづちは話し手が発話権を行使している間の聞き手としての反応がその基本的性質であると考えられる。本稿では二言語使用者の語用論的転移の観点からあいづちの研究を行った Tao and Thompson (1991 : 210) の定義に従い、狭義のあいづちを“short, non-lexical utterances produced by an interlocutor who is primarily playing a listener’s role while the other interlocutor is speaking”と考える。その代表的な表現は“aha”、“uh-huh”、“mhm”、“yeah”等で、これらは特定の意味情報を有していない。しかし、外国語による会話では当然、母語からの転移が予測され、本稿の調査目的が日本語話者の英語会話におけるあいづち行動であることを考慮すると、日本語のあいづち的表現に対する配慮が必要となる。そこで、短い陳述表現、繰り返し、言い換え、先取り発話（文の完成）を広義のあいづちとして調査対象に含める。広義のあいづちはいずれも特定の意味情報をもつ。“Yes”、“Okay”、“I see.”、“Right”、“Really”等が短い陳述表現の代表的な例である⁽³⁾。繰り返しとは、話し手の発話の一部、あるいは全体を繰り返す場合、言い換えとは、話し手の発話内容と同一の内容を異なった言語表現で発する場合である。先取り発話は、話し手の発話内容を予測して、話し手の発話に続けて聞き手が文を完成させるものである。

2. 調査

2.1. 調査資料

次の2種類の約30分間におよぶ英語会話（以下、データ1、データ2と呼ぶ）をビデオに録画すると同時に、MDに録音した。会話終了後、15分程度のフォローアップ・インタビューを行った。英語会話を文字化した⁽⁴⁾もの、ならびにフォローアップ・インタビューの内容が本調査の基礎資料である⁽⁵⁾。

データ1

録画日：2003年2月22日

状況：初対面

テーマ：留学生のための歓迎会の企画

会話参加者：J1 日本人男子大学生、TOEFL 570点、海外滞在経験なし

J2 日本人女子大学生、TOEFL 570点、オーストラリア滞在経験あり

A1 アメリカ人男子学生、大学の留学生別科で日本語を勉強するために来日

A2 アメリカ人女子学生、大学の留学生別科で日本語を勉強するために来日

データ2

録画日：2003年6月14日

状況：日本人参加者は同一の大学に勤務しているため、初対面ではない。アメリカ人同士、アメリカ人と日本人は初対面である。

テーマ：異文化体験について

会話参加者：J3 日本人男性、40代の体育教育の大学助教授、英語で論文を執筆したり口頭発表の経験あり

J4 日本人男性、40代の数学専攻の大学助教授、英検1級合格、数学に関する数冊の書物の英語翻訳経験あり

A3 アメリカ人男性、60代の日本のアメリカ軍基地の教員、数年にわたり日本に滞在、日本語コミュニケーション能力なし

A4 アメリカ人男性、40代の日本の米軍基地の事務官

会話参加者、会話のあり方について補足しておく。日本人会話参加者はみな日本で生活しているため、日常的に英語を使う環境にはない。ただし、データ1の日本人は大学の英語の授業は履修している。データ2の日本人会話参加者は同一の大学に勤務しているが、所属する部署が異なるため日常的に接触する機会はほとんどない。

データ1のアメリカ人会話参加者は来日したばかりで日本語能力も日本文化に対する知識もほとんどない。データ2のアメリカ人会話参加者は米軍基地勤務であるということから、日常生活で日本人との接触はほとんどない。

会話のあり方はテーマによって異なる。データ1は留学生のための歓迎会を企画するというタスクを完成させる会話である。歓迎会の開催場所、開催時間等、話し合っ決めておくべき事項が列記してあるタスクシートが会話参加者には渡されている。データ2は異文化理解についての自由会話である。

2.2. 調査手順

まず狭義のあいづちを中心に調査し、日本語母語話者と英語母語話者とのあいづち使用の量的

比較を行う。その後、日本語母語話者の聞き手としての言語行動の側面を捉えるために、広義のあいづちの使用状況について調査する。

3. 結果

3.1. 発話量

30分の会話における各会話参加者の発話量を比較する指標として発話数⁶⁾を用いることにする。各会話参加者の発話数と、全発話数に占める割合を示したのが表1である。

表1 会話参加者の発話量

会話参加者	データ1					データ2				
	J 1	J 2	A 1	A 2	合計	J 3	J 4	A 3	A 4	合計
発話数(語)	1148	447	873	860	3328	329	111	1374	2166	3980
全発話数に占める割合	35%	13%	26%	26%		8%	3%	35%	54%	

データ1では、J1の発話数が最も多く、英語母語話者を上回っている。次に多いのがA1である。J2の発話数は英語母語話者の約半分である。このことから、主にJ1、A1、A2の発話で会話が展開されたことがわかる。母語話者と非母語話者による会話では、一般に母語話者の発話量のほうが多くなることが予想されるが、データ1のアメリカ人は来日したばかりで日本での経験があまりないこと、会話のテーマが日本での留学生歓迎会の企画であったことがアメリカ人の発話量に影響を与えたと考えられる。

データ2では、A4の発話量が圧倒的に多く、会話の半分以上を占めている。データ2では二人のアメリカ人の発話が中心になって会話が展開され、日本人はあまり発話していないことがわかる。

3.2. 狭義のあいづちの使用

各会話参加者の狭義のあいづちとしての発話数を示したのが表2である。“Yeah, yeah, yeah”のように同一表現が連続して使用されている場合、1発話のあいづち⁷⁾とみなす。

表2 会話参加者の狭義のあいづち発話数とその割合

会話参加者	データ1					データ2				
	J 1	J 2	A 1	A 2	合計	J 3	J 4	A 3	A 4	合計
あいづち発話数	73	56	24	34	187	74	2	7	10	93
全あいづち発話数に占める割合	39%	30%	13%	18%		79%	2%	8%	11%	

データ1では日本語母語話者のあいづち発話数が英語母語話者のあいづち発話数を上回っている。特に、J2は発話量が他の会話参加者に比べて少ないことを考慮すると、かなり頻繁にあいづちを打っていたことになる。(1)はA2の発話に対するJ1、J2のあいづち行動である。

(1) J1、J2のあいづち行動

J1 : So, usually, what kind of party do you have?

A2 : Ah, like orientation thing. Then probably be, like a bar, a table, with a bunch of food set out and you try on and then, some tables are set out, and so everyone could just come in and get their food

J 2 : Mmhmh.

A 2 : and start mingling, you know, talking to each other

J 1 : Mmhmh.

A 2 : and then, um maybe a couple of speakers will talk a little bit of university or stuff like that.

J 2 : Mmhmh.

A 2 : What do you think? (A 1 に対して)

データ2では会話中に発せられたあいづちのほとんどがJ3によるものである。J4は発話量、あいづち発話数も少ない。A3、A4の発話量から考えると、英語母語話者はほとんどあいづちを打っていないことになる。(2)はJ3のあいづち行動である⁽⁸⁾。これはA3とA4が日本人はあまり見知らぬ人に対して手助けをしないという話をしている場面で、J3はA4の発話に対してあいづちを打っている。

(2) J3のあいづち行動

A 4 : But, you are from New York City though, right?

A 3 : Oh, yeah I'm used to that, I'm used to that.

A 4 : So, you are from, then as he the completely opposite, he's grown up in places as diversified and different races.

J 3 : Mhm.

A 4 : In New York city

J 3 : Mhm.

A 4 : you've got them all.

ところで、このようなあいづちはだれが発話権をもっているときに発せられたのであろうか。会話参加者の発話量と関係があるのだろうか。表3、4はデータ1、2の各会話参加者のあいづち発話数と発話権保持者(あいづちの受け手)との関係を示したものである。

表3 データ1のあいづち発信者とその受け手

あいづちの 受け手 あいづち発信者	J 1	J 2	A 1	A 2	合計
J 1		16	31	26	73
J 2	21		14	21	56
A 1	16	5		3	24
A 2	17	9	8		34

表4 データ2のあいづち発信者とその受け手

あいづちの 受け手 あいづち発信者	J 3	J 4	A 3	A 4	合計
J 3		0	15	59	74
J 4	0		1	1	2
A 3	3	1		3	7
A 4	3	1	6		10

データ1のJ1のあいづちは、会話参加者の発話量にほぼ対応しているが、J2はA1よりA2に頻繁にあいづちを打っている。A1、A2は、アメリカ人同士ではあまりあいづちを打っていないが、日本人に対して頻繁に打っている。特に発話量の少ないJ2に対するあいづちがアメリカ人に対するあいづちを上回っている。

データ2のJ3のあいづちは発話量の多いA4に対するものが80%を占めている。アメリカ人はデータ1と同様、アメリカ人同士ではほとんどあいづちを打っていないが、発話量の少ない日本人に対してあいづちを打っている。また、A3がJ3の発話中に発したあいづちとA4の発話中に発したあいづちは同数であり、A3、A4いずれもJ4に対して1回あいづちを打っている。

3.3. 広義のあいづち

広義のあいづちの使用状況は表5のとおりである。言い換え、先取り発話は現れなかった。

表5 会話参加者の広義のあいづちの使用

広義のあいづち		データ1				データ2			
		J1	J2	A1	A2	J3	J4	A3	A4
短い陳述表現	Yes	7	1		1			2	
	Okay	13	1		1				1
	Right			12	1				
	I see.	2							
	That's true.			1					
	Ah, you're right.	1							
	Ah, that's too bad.	1							
繰り返し		1		1		3			
合計		25	2	14	3	3	0	2	1

データ1では、7種類の短い陳述表現が用いられている。様々な表現を用いているのがJ1で、そのなかで“okay”が最も多く使われている。A1は“right”を多く使っており、使用する表現に個人差がみられる。J2とA2はあまり広義のあいづちを使用していない。

(3)(4)はJ1のあいづち行動である。(3)はパーティーの目的について話し合っている場面での、“okay”の使用例、(4)はパーティーの開催時間について話し合っている場面でのあいづち使用例で、1発話のなかに“I see”と“okay”の2種類の表現が用いられている⁽⁷⁾。

(3) J1のあいづち行動

A2 : I think just to get to know each other

J1 : Okay.

A2 : I guess the, and like, I think it's yeah kinda make connections and get to know some Japanese students

J1 : Mmhmh.

A2 : and (...) questions, you know, you know you can ask somebody

J1 : Okay.

A2 : about Japanese culture. If you're not sure about something you just wanna check with your

friend.

(4) J 1 のあいづち行動

- A 1 : How about four to eight.
 A 2 : Four to eight.
 J 1 : Four to eight? Four hour?
 A 1 : Yeah, then you can come, come and go
 J 1 : [Mmhmh.
 J 2 : [Mmmh.
 A 1 : You don't have to be there a long time
 J 1 : [I see.
 J 2 : [Mmm.
 A 1 : you can just leave whenever
 J 1 : I see, okay.
 A 1 : and then go.

(5) は(4)の発話の続きで、A 1 が“right”を使用している。

(5) A 1 のあいづち行動

- J 1 : So people can want, people can join party whenever they want.
 A 1 : Right.

データ2では広義のあいづちはほとんど使用されていない。注目すべきなのは、J 3 の「繰り返し」の使用である。(6)にその例を示す⁷⁾。

(6) J 3 のあいづち行動

- A 3 : Sometimes I teach at Zama
 J 3 : Zama, ah.
 A 3 : sometimes Yokosuka, sometimes
 J 3 : Ah.
 A 3 : Fuji, sometimes we say Atsugi.

3.4. あいづち的表現の連続使用

Tao and Thompson (1991: 218) は、1 発話のなかに複数のあいづち、あるいはあいづち的表現を用いることを‘backchannel clustering’と呼んでいる。このような現象はデータ1のA 1、A 2では2 発話、J 1 では11 発話に見られ、データ2のA 3、A 4では1 発話、J 3 では3 発話に現れた。すでに紹介した(4)(6)にもこの現象は見られる。

(7) は J 1 の例で、“yes”が6 回用いられている。パーティーで教師にカラオケをしてもらい、それに対して学生が評価しようという提案をA 1 がし、それに対してA 2 が意見を述べている場面である。

(7) J 1 のあいづち

- A 2 : I do, too. Maybe though, could be fun though. Or we could just maybe plan to have some Japanese music in the background.
 J 1 : Yes, yes, yes, yes, yes, yes.

3.5. フォローアップ・インタビュー

村田(2003)によれば、データ1の日本語母語話者、英語母語話者いずれの会話参加者からも

違和感は指摘されなかった。一方、データ2は日本語母語話者、英語母語話者の双方から違和感が指摘された(重光(2005:226))。日本人からは「息つくひまもない」「大変疲れた」「ついていくのが精一杯」、アメリカ人からは「日本人がしゃべらない」「答えない」「反応がない」という感想が出されたとのことである。

4. 考 察

データ1、データ2いずれも日本語母語話者は英語母語話者よりも頻繁にあいづちを打っている。これは狭義、広義いずれの場合も同様で、その結果、日本語母語話者のほうが英語母語話者より多様な表現をあいづちとして使用していることがわかる。フォローアップ・インタビューによると、データ1の会話参加者からは何ら問題が指摘されなかったのに対し、データ2では日本語、英語いずれの母語話者も相手に対してよい印象をもたなかった。いずれの日本語母語話者もあいづちに関しては同じような行動をとっているにもかかわらず、なぜこのような違いが生まれたのであろうか。この点を会話管理の観点から考える。

データ1とデータ2との大きな違いは日本語母語話者の発話量である。これは会話のテーマとも密接な関係がある。データ1ではパーティーの企画というタスクが与えられており、話し合っただけで決定しなければならないことがリストで示されている。したがって、自ら話題を探して提供する必要はない。一方、データ2は異文化理解についてという、やや漠然としてテーマが与えられた自由会話であるため、会話参加者自らが話題を提供していかなければならない。

データ1に比べると会話管理の難しい状況におかれたデータ2の日本人参加者は、英語の読み書き能力があり、英語による学会口頭発表の経験もある。発話量の少ないJ4は二人のアメリカ人の発話内容はほとんど理解していたと報告しているし、また、本人が会話中にとっていたメモもアメリカ人の発話内容を正しく理解していることを示すものであった(大塚(2007))。データ2の日本人参加者の語彙や文法に関する英語力は平均的な日本人以上だと考えられる。しかし、日常的に英語を使用する必要性がないため、相手の発話内容を理解するのにも限界があり、実際に英語でコミュニケーションを図ることに慣れていない。このような日本人に対するアメリカ人側の対応は、(8)に示すように日本人に質問して、発話の機会を与えようとするものである。

(8) A4の質問とJ3の対応

A4: Have you both been to United States? Visiting or working?

J3: Oh, I, I had been to the United States in Santa Barbar

A4: Santa Barbara? In California?

J3: California, yes, Santa Barbara, about two weeks.

A3: Ok, so I think there a pretty, a lot of a, races and people.

J3: Pardon? Um, different cultures?

(8)でJ3はA4の質問に答え、A4はこの返答をきっかけに会話を展開していこうとする。しかし、英語母語話者側に話すスピードを落とすといった、日本人の英語能力に対する配慮がなかったため、J3は聞き返しを行っている。「息つくひまもない」「ついていくのに精一杯」というフォローアップ・インタビューにおける感想が示すように、日本人側はアメリカ人の発話内容を理解するのに精力を使い、質問に答えるのにも時間がかかったようである。このような状況で日本人が自ら話題を提供したり、提供された話題を基に会話を展開したりするようなことは不可

能に近い。結果として日本語会話における聞き手の役割を演じる以外にこの英語会話に参加する方法がなかった。それがあいづちを打つことである。共話型の日本語では、相手の話し手を聞いているという信号を送ることで会話に参加していることになり、話し手と聞き手との知識の共有が図れるからである。これは Brown and Levinson (1987: 102) のいう 'common ground' を共有することになり、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つと考えられる (大塚 (2005: 65))。このように考えると、J3 の3回の広義のあいづち使用は、「繰り返し」ではあるが、相手の発話に積極的に反応しようとする態度の現われであると考えられ、評価すべきものと言えるだろう。しかし、日本人側のあいづちのほとんどは日本語の「うん」に近い形式のもので、英語母語話者には明確な反応として解釈されなかった。英語母語話者側は日本人のわずかな発話にあいづちを打って対応してはいるが、彼らが日本語母語話者側に求めたのは、発話することによって会話に参加することなのである。フォローアップ・インタビューにおける「日本人がしゃべらない」「答えない」というアメリカ人の感想は、その証左と言えよう。これは対話型の英語の会話展開であって、そこでは日本語母語話者によるあいづちはポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしては機能せず、円満な人間関係を構築することにつながらなかった。

では、データ1はどうだろうか。データ1の日本語母語話者も頻繁にあいづちを打っているが、フォローアップ・インタビューの結果から判断すると、久保田 (2001) の指摘する、発話権がほしいという信号という、マイナスの解釈はされなかったようである。これは日本人の発話量、特にJ1の発話量が多かったからだと考えられる。この会話は発話量からみると、J1が主導権をとって展開していったように思われる⁽⁹⁾が、会話冒頭の自己紹介はA2、A1、J1、J2の順に行われ、その後、最初にターンをとったのはA2である。

データ1の日本人のあいづち行動で着目すべきことは二つある。一つは使用されたあいづちの種類の数である。日本人参加者は狭義のあいづちだけでなく、広義のあいづちの使用も英語母語話者より多い。J1は backchannel clustering も行っており、あいづちとして使用された表現に多様性がある。広義のあいづちは聞いている、理解している、同意するという信号として機能するだけでなく、あいづち発信者の感情や話し手の発話内容に対する判断を示すことになり、同じ聞き手としての反応であってもより積極的に 'common ground' の共有に貢献できる。

二つ目はJ2のあいづち行動である。J2は留学経験があるが、発話量は会話参加者のなかで最も少なく、狭義のあいづちの頻度は英語母語話者よりも高い。これは、日本語の会話における聞き手としての反応であり、データ2のJ3の行動と共通するところがある。J3と異なる点は、村田 (2003) が指摘するように沈黙が生じた場合の対処である。J2は沈黙が英語母語話者にとっては居心地の悪さになることを意識しており、単にあいづちを打つだけでなく、自ら相手に質問することによって、沈黙を破る努力をしていた。

ここで、データ1の英語母語話者の日本人の発話に対する反応を検討する。3.2. で述べたように、A1、A2いずれも日本人の発話に対して狭義のあいづちを打っている。特に、最も発話量の少ないJ2に対するあいづち数が発話量の多い英語母語話者に対するあいづち数を上回っている。White (1989) は、英語母語話者同士、日本語母語話者同士、英語母語話者と日本語母語話者による3種類の英語会話におけるあいづちを調査した。英語母語話者と日本語母語話者による会話では、英語母語話者は母語話者同士のときよりあいづちの頻度が高くなり、逆に、日本語母語話者は母語話者同士のときよりあいづちの頻度が低くなったと報告している。異言語話者との会話におけるこの変化は英語母語話者のほうが日本語母語話者より大きかったという。この現

象に対し、White は母語話者が非母語話者の会話のスタイルに合わせたのではないかと述べている。この仮説¹⁰が正しいとすれば、データ1の英語母語話者は日本語母語話者の会話のスタイルに合わせて頻繁にあいづちを打ち、そのことが‘common ground’の共有につながり、会話の展開を円滑にする一助になったと言えるかもしれない。

おわりに

英語母語話者と日本語母語話者による英語会話2例におけるあいづちの使用状況を会話管理の観点から調査した。1例は双方の母語話者が互いの会話管理のストラテジーを持ち込んだため、互いにより印象をもたなかった。もう1例は双方が相手の母語への配慮をしたため、少なくとも悪い印象を与えることなく、会話が終了した。

会話は聞き手と話し手との協力のもとに行われる、相互作用であると考えられる。ここで重要なことは、会話は単なる情報のやりとりだけではなく、人間関係の構築に関わる要素が含まれているということである。データ2のJ3のあいづち行動はその表現にもう少し多様性があれば、円滑な会話展開につながり、よりよい人間関係が構築できたかもしれない。逆に、同じあいづち行動が英語とは異なる会話管理をもつ母語話者が相手であれば、何ら問題がなかった可能性もある。逆に、データ2のアメリカ人参加者に非英語母語話者との会話であるという意識があれば、何らかの人間関係を築くことができたかもしれない。一つの会話管理ストラテジーの解釈は文化によって異なり、その文化の価値観によって同一のストラテジーが人間関係構築に貢献する場合もあれば、しない場合もあるのである。

本稿では、言語表現に限って調査したが、聞き手の反応は言語表現によるものだけではなく、うなずきや視線など非言語行動によっても行われる。聞き手による様々なストラテジーが会話管理にどのような影響を与えるのか、話し手との相互作用を含めた総合的な調査・分析が今後、必要であろう。

注

- (1) 日本語母語話者、英語母語話者のことを文脈に応じて日本人、アメリカ人と表記することもあるが、同一の意味を表している。
- (2) “continuer”は Schegloff (1982: 81) が用いた用語である。
- (3) 聞き手の反応に対し、相手が“yes”で応答しているものは、疑問文と解釈し除外した。
- (4) あいづちが調査項目であるため、他の発話者との重なりがあっても独立した行に記す。
- (5) 本稿でデータとして用いる会話は平成15年～16年度科学研究費補助金研究基盤研究CⅡ1Ⅹ(課題番号15520379)「日本人が話す英語に見られる対人関係構築・維持上の問題点の解明」(研究代表者 堀素子)によるものである。会話の録画、文字化作業、分析の共同作業をした堀素子氏、津田早苗氏、村田泰美氏、重光由加氏、大谷麻美氏、村田和代氏に感謝申し上げる。
- (6) 原資料は Hori et al. (2005) である。
- (7) 1発話に複数のあいづち・あいづち的表現が用いられる現象は、‘backchannel clustering’として3・4で扱う。
- (8) J3、J4のあいづち行動の詳細は大塚(印刷中)参照。
- (9) J1が会話管理のうえで主導権をとっていたか否かは、聞き手としての行動だけではなく、話し手との行動を含めて検討する必要がある。
- (10) White (1989: 68) は Accommodation Hypothesis と呼んでいる。

文字化の記号について

- ・ 語尾の音が下がって区切りがついたことを示す。
 - ? 語尾の音が上がっていることを示す。
 - (...) 聞き取り不明であることを示す。
 - [複数行にまたがる括弧は会話参加者の発話が重なっていることを示す。
- 行末の あいづちなど相手の発話が一時的にかさなっているが、発話が継続していることを示す。
- 語頭の 分析の焦点であることを示す。

参考文献

- 大塚容子 (2005) 「テレビインタビュー番組におけるあいづち的表現 ポライトネスの観点から」『岐阜聖徳学園大学紀要』第44集、55-69頁
- 大塚容子 (2007) 「日本語のあいづちは異文化でどのように解釈されるのか 会話の展開方法の観点から」岐阜聖徳学園大学外国語学部編『異文化のクロスロード』彩流社、139-165頁
- 久保田真弓 (2001) 『「あいづち」は人を活かす』廣済堂出版
- メイナード、泉子・K (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 重光由加 (2005) 「何を心地よいと感じるか 会話のスタイルと異文化間コミュニケーション」井出祥子・平賀正子編『講座社会言語学 1 異文化と異文化間コミュニケーション』ひつじ書房、216-237頁
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号、13-26頁
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」水谷修編『講座 日本語と表現 3 話しことばの表現』筑摩書房、37-44頁
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』第7巻13号、4-11頁
- 村田晶子 (2000) 「学習者のあいづちの機能分析 「聞いている」という信号、感情・態度の表示、そして turn-taking に至るまで」『世界の日本語教育』第10号、241-260頁
- 村田泰美 (2003) 「初対面の日本人とアメリカ人の会話 (1)」第21回日本英語学会ワークショップ「Faceの普遍性と Discourse におけるポライトネスの表出」口頭発表
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Duncan, Starkey, Jr. 1974. On the structure of speaker-auditor interaction during speaking turns. *Language in Society*, 2, 161-180.
- Hori, Motoko, Tsuda, Sanae, Murata, Yasumi, Otsuka, Yoko, Shigemitsu, Yuka, Murata, Kazuyo and Otanai, Mami. 2005. Discourse Problems in Cross-Cultural Conversations. Panel papers presented at the 9th International Pragmatics Association.
- Maynard, Senko K. 1997. *Japanese Communication: Language and Thought in Context*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Schegloff, Emanuel A. 1982. Discourse as an interactional achievement: some uses of 'uh huh' and other things that come between sentences. *Georgetown University Roundtable on Language and Linguistics*, ed. by Deborah Tannen, 71-93. Washington, D. C.: Georgetown University Press.
- Tao, Hongyin and Thompson, Sandra A. 1991. English backchannels in Mandarin conversations: A case study of superstratum pragmatic 'interference'. *Journal of Pragmatics*, 16, 209-22.
- White, Sheila. 1989. Backchannels across cultures: A study of Americans and Japanese. *Language Sociology*, 18, 59-76.
- Yngve, Victor H. 1970. On getting a word in edgewise. Paper from the sixth Regional meeting, *Chicago Linguistic Society*, 567-578.
- [付記] 本稿は平成18年度岐阜聖徳学園大学研究助成金による研究の一部である。